

太田 耳動子（おおた・じどうし）

1、プロフィール

青森中学校在学時代に、俳句グループに接触、この縁で俳句が生涯の事業となった。原石鼎主宰の「鹿火屋」に参加した。リズムを重視、写実を基調としている。

<生没>

1898(明治 31)年3月 15 日 ~ 1966(昭和 41)年8月 21 日

<代表作>

『耳動子句集』『定本耳動子句集』

<青森との関わり>

青森町新町番外戸(現青森市)に生まれ、新町小、長島小、浦町高等小学校から県立青森中学校に入る。仲間と俳句を作った。

2、作家解説

俳人。明治 31 年青森町新町番外戸(現青森市)に生まれた。新町小に入学、長島小で卒業、浦町高等小学校に進んだ。大正 2 年、県立青森中学校に入学した。中学時代はスポーツ万能の選手として活躍し、特に剣道をよくした。また、俳句を同級の工藤哲郎らにすすめられてはじめた。5年生の時には俳句誌「眸」を発行するようになる。

7年成蹊実業専門学校に入学した。学生時代、原石鼎を選者とする東京日日新聞社の俳句会に欠かさず出席するようになった。大正 10 年専門学校を卒業し、三菱製鉄会社へ入社した。この年、石鼎主宰の俳句誌「鹿火屋」が発刊され、これに参加、のちには中堅として活躍することとなった。翌年三菱銀行に転任、オール三菱俳句会を創立した。

14年石鼎の指導のもとに俳句誌「睦月」を創刊した。また、この頃登山やスキーに励み、ことに登山は終生の楽しみとする。日本山岳会会員にもなり、深田久弥とも親交があった。

15年「鹿火屋」編集委員となったが、翌年長年勤めた三菱銀行を退め、青山合金機械製作所に勤める。

戦時中休刊していた雑誌「睦月」を戦後まもなく再刊した。この雑誌は俳句雑誌であったが、28年から美術雑誌としての性格も備えていった。この関係から『耳動子句集』(36年1月睦月社刊)には、日本画家奥村土牛らの挿絵が見えている。

俳句は、生涯石鼎の弟子としての立場を貫いた。写実主義の句から次第に石鼎から離れ、語感やリズム重視の句などに独自の境地を示した。

露るりの光を放ち朝餉前 耳動子

カラオラと啼く歌姫の春鴉 耳動子

昭和41年8月21日68歳で没した。没後に『定本耳動子句集』(47年8月東京美術刊)が刊行された。

3、資料紹介

○『耳動子句集』

図書

1961(昭和36)年1月20日

195mm×141mm

句集は、睦月社より刊行された。375句を三部構成で表現している。序文工藤哲郎、解説古川克己、それに年譜と耳動子のあとがきがある。登山家の一面がみえる口絵写真である。初期の写実の句から主観やリズム・語感重視の句などまで多彩である。